

沖縄経済同友会

「タイ・ミャンマー視察」報告書

平成26年1月

主催：国際委員会

共催：観光委員会

環境・エネルギー委員会

目 次

1. タイ・ミャンマー視察の目的・・・・・・・・・・・・・・・・	P 2
2. 視察団名簿・・・・・・・・・・・・・・・・	P 2
3. 視察日程表・・・・・・・・・・・・・・・・	P 3
4. タイ・ミャンマーの社会・経済・・・・・・・・	P 5
5. 視察の総括 国際委員会委員長（視察団長） 稲嶺有晃	P 7
6. 視察先別の報告	
【タイ】	
(1) ジェトロバンコク事務所・・・・・・・・	P 18
石垣 卓哉（沖縄経済同友会 事務局次長）	
(2) タイ国沖縄県人会との懇親会・・・・・・・・	P 23
石垣 卓哉（沖縄経済同友会 事務局次長）	
(3) DIA MERCHANDISE CO., LTD（三菱商事系日本食品卸売会社）	P 24
伊野波 盛久（㈱琉球銀行 執行役員地域第二部長）	
(4) ㈱シーポイントタイランド（㈱ていだスクエア グループ会社）	P 26
出村 郁雄（㈱おきぎん経済研究所 代表取締役社長）	
【ミャンマー】	
(5) JICAミャンマー事務所・・・・・・・・	P 31
武島 貞夫（㈱沖電工 取締役保修部長）	
(6) 丸紅㈱ヤンゴン支店、全日本空輸㈱ヤンゴン支店	P 34
比嘉 正彦（沖縄経済同友会 事務局長）	

1. 視察の目的

平成 23 年 9 月に沖縄経済同友会が県知事に提出した『新たな沖縄振興計画（産業振興）に対する提言書』ではアジアへのビジネス展開を強調しており、その可能性の調査・研究は当同友会全体の活動テーマとして位置付けられる。これを受けて、国際委員会では、アジアを中心に海外展開を進めている企業との意見交換、海外事情に詳しい専門講師による講演等を行ってきた。これまでアジアでのビジネス展開を調査するための海外視察を検討してきたところ、昨年同様、日本企業の進出が相次ぎ、また今後の経済成長が期待されているタイ・ミャンマーを視察することとした。今回の視察は、観光委員会、環境・エネルギー委員会との共催である。

今回、タイでは、ジェトロバンコク事務所、DIA MERCHANDISE CO., LTD（三菱商事系日本食品卸売会社）、シーポイント（㈱ていだスクエア グループ会社）と情報交換、タイ国沖縄県人会と懇親会をした。また、ミャンマーでは、JICAミャンマー事務所、丸紅㈱ヤンゴン支店、全日本空輸㈱ヤンゴン支店と情報交換及び開発予定地を視察した。

視察に際して、現地視察先との調整等でご協力いただいた三菱商事㈱、丸紅㈱、全日本空輸㈱、JETRO、JICAの沖縄事業所の方々に深く御礼申し上げます。

2. 視察団名簿

（敬称略）

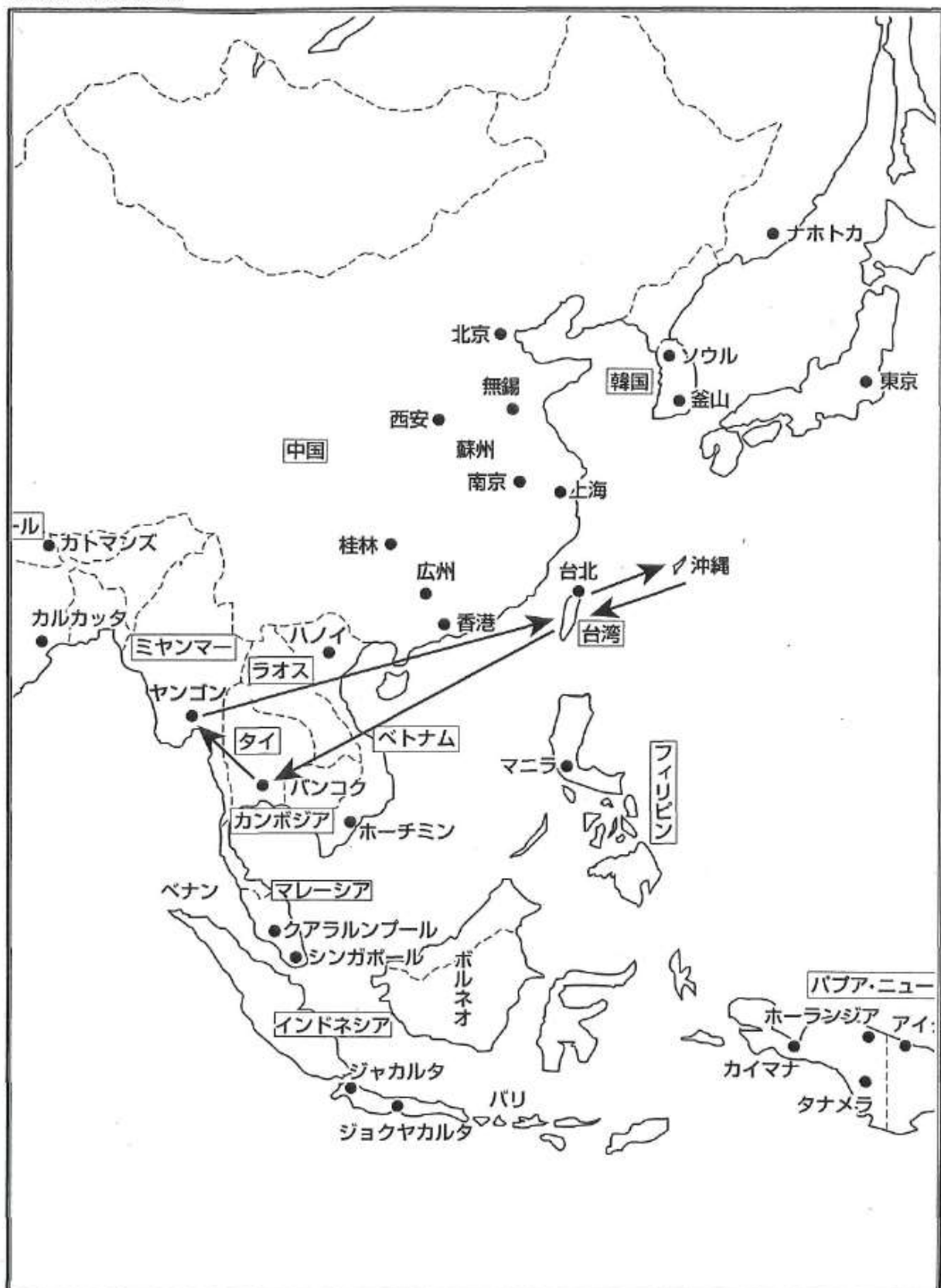
氏 名	当会役職	会社名・役職
玉城 義昭	代表幹事	㈱沖縄銀行 代表取締役頭取
瀧辺 美紀	副代表幹事	㈱ビジネスランド 代表取締役社長
東 良和	副代表幹事	沖縄ツーリスト㈱ 代表取締役社長
稲嶺 有晃	常任幹事	東亜運輸㈱ 代表取締役社長 ※視察団長
出村 郁雄	常任幹事	㈱おきぎん経済研究所 代表取締役社長
奥 キヌ子	会 員	レキオファーマ㈱ 代表取締役社長
下地 寛	会 員	那覇空港ビルディング㈱ 専務取締役
伊野波 盛久	オブザーバー	㈱琉球銀行 執行役員地域第二部長
武島 貞夫	オブザーバー	㈱沖電工 取締役保修部長
豊川 眞弘	オブザーバー	沖縄サントリー㈱ 取締役総務部長
名嘉 正隆	オブザーバー	㈱おきぎんリース 常務取締役
比嘉 正彦	事務局長	沖縄経済同友会事務局
石垣 卓哉	事務局次長	沖縄経済同友会事務局
玉城 今	—	沖縄ツーリスト㈱ チーフ ※添乗員

3. 視察日程表《平成25年11月26日（火）～12月2日（月）》

	日付	時間	行程	宿泊地
一日目	11月26日 (火)	11:55 12:30 13:55 16:45	那覇空港出発 台北（桃園空港）到着 ※時差▲1時間 台北（桃園空港）出発 バンコク（スワンブーム国際空港）到着 ※時差▲1時間	(バンコク) シャングリラ
二日目	11月27日 (水)	10:00 午後 20:00	ジェトロバンコク事務所 世界遺産・アユタヤ遺跡と旧日本人町 タイ国沖縄県人会と懇親会	〃
三日目	11月28日 (木)	09:00 11:00 14:45	DIA MERCHANDISE CO., LTD (三菱商事系日本食品卸売会社) 市場視察（BIG-C（ハイパーセンター）） シーポイント（㈱ていだスクエアグループ）	〃
四日目	11月29日 (金)	午前 13:00 13:45 16:00	2組に別れて、市内観光・ショッピング バンコク（スワンブーム国際空港）出発 ヤンゴン国際空港到着 ※時差▲0.5時間 JICAミャンマー事務所	(ミャンマー) ガンドー パレス
五日目	11月30日 (土)	日中	ミャンマー最大の聖地シェダゴン・パゴダ、 古都バゴー、三大仏塔、他	〃
六日目	12月1日 (日)	午前 12:00	ティラワ工業団地視察 (丸紅㈱案内、全日本空輸㈱同行) 丸紅㈱ヤンゴン支店、全日本空輸㈱ヤンゴン支店	〃
七日目	12月2日 (月)	11:50 17:15 18:00 20:15	ヤンゴン国際空港出発 台北（桃園空港）到着 ※時差+1.5時間 台北（桃園空港）出発 那覇空港到着 ※時差+1時間	—

東南アジア

South East Asia



沖縄ツアーリスト 株式会社

4. タイ・ミャンマーの社会・経済

【タイ】

(1) 社会

正式名称	タイ王国
面積	約 51 万 4,000 km ² (日本の約 1.4 倍)
気 候	暑季 (4 月～5 月)、雨季 (6 月～10 月)、乾季 (11 月～3 月)
人 口	約 6,593 万人 (2010 年) ※ASEAN の中で、インドネシア、フィリピン、ベトナムに次いで 4 番目
首 都	バンコク ※人口：約 830 万人 (構成比 12.6%)
言 語	タイ語
民 族	大多数がタイ族。その他、華僑、マレー族、山岳少数民族など
宗 教	仏教 (95%)、イスラム教 (4%)
政 治	立憲君主制
日本との時差	▲ 2 時間
通 貨	バーツ ※1 バーツ=約 3 円

(2) 主要経済指標

項 目	2010 年	2011 年	2012 年
実質 GDP 成長率 (%)	7.8	0.1	6.5
一人当たり名目 GDP (ドル)	4,992	5,395	5,678
消費者物価指数 (2007 年=100)	108.0	112.1	n. a.
失業率 (%)	1.04	0.68	0.66
輸出額 (100 万ドル)	193,306	222,576	229,519
対日輸出額 (100 万ドル)	20,309 (10.5%)	23,870 (10.7%)	23,480 (10.2%)
輸入額 (100 万ドル)	182,921	228,787	247,590
対日輸入額 (100 万ドル)	37,854 (20.7%)	42,206 (18.4%)	49,580 (20.0%)

出所：ジェトロ

【ミャンマー】

(1) 社会

正式名称	ミャンマー連邦共和国
面積	約 68 万km ² (日本の約 1.8 倍)
気 候	雨季 (5 月～10 月中旬) 乾季 (10 月下旬～2 月) 暑期 (3 月～5 月)
人 口	約 6,367 万人 (2012 年) ※人口構成: 0 歳～14 歳: 29.4% 15 歳～59 歳: 61.8% 60 歳以上: 8.8%
首 都	ネピドー ※人口: 約 100 万人 (構成比 1.6%) (ヤンゴンの人口は約 695 万人 (構成比 10.9%) となっている。)
公用語	ミャンマー語 (ビルマ語) と英語
識字率	89.9% (男性: 93.9% 女性: 86.4%)
民 族	ビルマ族 (69%)、シャン族 (8.5%)、等 135 の少数民族で構成
宗 教	仏教 (89.4%)、キリスト教 (4.9%)、イスラム教 (3.9%)
時 差	日本との時差: ▲2 時間 30 分
通貨 物 価 賃 金	チャット 1 ドル≒972 チャット ※100 円≒972 チャット (2013/10/23 現在) 物価水準目安 ⇒ ミネラルウォーター/250 チャット コーヒー/300 チャット 生ビール/600 チャット 一般的な月給 ⇒ 工場一般作業員月給: 70,200 チャット (約 82 ドル)
資 源 産 業	天然ガス、石油、鉱物資源 (ヒスイ、ルビー) 農業 (米)、林業 (チーク材)、繊維軽工業
政 治	1988 年 民主化運動の後、クーデターにより軍事政権誕生 1990 年 総選挙でアウンサンスーチー女史圧勝するも国会開催されず 2008 年 憲法に基づき総選挙実施。選挙直後にスーチー女史解放 2011 年 ティンセント大統領 (元軍 No.4) が選出され新政権誕生 (任期 5 年)

(2) 主要経済指標

	単位	ミャンマー	アセアン合計	シンガポール	タイ	ベトナム	日本
名目 GDP	10 億ドル	53	2,206	277	366	138	5,964
GDP (PPP 購買力補正)	10 億ドル	89	3,606	327	652	321	4,628
世界シェア GDP (PPP 補正)	%	0.1%	4.3%	0.4%	0.8%	0.4%	5.6%
1 人当り GDP	ドル	835	3,745	51,162	5,678	1,528	46,736
1 人当り GDP (PPP 補正)	ドル	1,405	5,857	60,410	10,126	3,548	36,266
人口	100 万人	63.7	615.6	5.4	64.4	90.4	127.6

(3) 輸出入 (相手国) 主要経済指標

	1 位 (割合%)	2 位 (割合%)	3 位 (割合%)	4 位 (割合%)
2012 年度 総輸出額: 89.8 億ドル	タイ (45%)	中国 (25%)	インド (11%)	日本 (5%)
2012 年度 総輸入額: 90.7 億ドル	中国 (30%)	シンガポール (28%)	日本 (12%)	タイ (8%)

出所: ジェトロ

5. 視察の総括 国際委員会委員長（視察団長） 稲嶺有晃

飛び込め！ Dive ASEAN！ ～タイ・ミャンマー経済事情視察に参加して～

1. はじめに

2013年11月26日(火)～12月2日(月)まで、国際委員会主催、観光委員会及び環境・エネルギー委員会共催で、タイ・ミャンマーを視察した。昨年2月のベトナム、今年2月のインドネシアに続く東南アジアの経済事情視察の第3弾である。

国際委員会では、今年度の活動方針において、「アジアをビジネスの交流拠点として最大限に生かすためにアジアを中心に海外展開を進めている企業との意見交換、アジアへのビジネス展開を調査するため海外視察を行うこと」を掲げた。その訪問先として今年度は、タイとミャンマーを視察先とした。

タイは、自動車を中心とした日本企業の東南アジアでの生産拠点として産業集積が進み、その地位を確立し周辺諸国のリーダー的存在である。大洪水後、経済は一時落ち込んだものの、再び日本企業の進出は著しい。一方、ミャンマーは今アセアン諸国で最も注目を浴びている。長年にわたる軍事政権から民主化へかじを切って2年、欧米諸国の経済制裁緩和により、各国の注目を浴び、今後の経済成長が期待されている。

視察団は、玉城義昭代表幹事（沖縄銀行頭取）、渚辺美紀副代表幹事（ビジネスランド社長）、東良和副代表幹事（沖縄ツーリスト社長）をはじめ14名。バンコク、ミャンマーのJETRO、JICA事務所、日系・沖縄系企業、経済特区などを視察した。それぞれの視察先の詳細は団員の報告によるとして、私は全体的な印象などを報告させていただく。

2. 事前学習会

出発前に両国の概要や経済情勢についての事前学習会を開催した。まず、10月23日に、中小企業基盤整備機構沖縄事務所（三澤孝所長）の協力を得て、同機構シニアアドバイザー八重樫正氏から「タイの投資環境と日本企業の進出事例について」ご講話をいただいた。タイへの投資が増え続ける理由や投資リスク、観光おすすめスポットなど現地での経験を通じた具体的なアドバイスをいただいた。また、同機構のミャンマーセミナーで使用した中小企業進出事例についての資料もいただき、両国の概要について基礎知識を得ることが出来た。

第2回は11月18日、タイ料理のスパイスハーブホリデーでタイの香辛料の利いたランチを取りながら、ミャンマーについて学習した。JICA沖縄国際センターの若杉聡氏に「ミャンマー国概要及びインフラ整備」についてご講話いただいた。若杉氏は2週間前に現地に出張していたとのことで、ODA、JICAの事業概要や視察予定先ティラワ経済特区の概要のほかに、最新のミャンマー情勢についてアドバイスいただいた。また、若杉氏が支援している麻薬撲滅のためのそば栽培とそば焼酎の説明があった。ミャンマーではぜひそば焼酎を購入して欲しいとのことであった。さらに、ミャンマーから琉球大学大学院に留学しているウィン・ミ・トゥエさん（琉球大学農学研究科）、リン・リン・チョツさん（琉球大学連合農学科）から、それぞれの出身地の概要や研究テーマについてお話しいただいた。

3. タイ

11月26日、いよいよ出発である。出発前に那覇空港国際線特別待合室で結団式を開催した。玉城代表幹事から今回の視察のテーマが発表された。「飛び込め」。机上ではなく、現地に赴いて、自らの目で見、感じ、行動することが大事だ。沖縄21世紀ビジョンに示された万国津梁の先駆けとして、アジアに飛び込もう！と視察がスタートした。

タイ（バンコク）3日、ミャンマー（ヤンゴン）3日、6泊7日の視察研修である。台北経由で午後バンコク・スワンナブーム国際空港に到着。広い空港に欧米やアジアの各国の人が集まる。アジアの熱気を感じる。バンコクの空は雨模様。時折雷が走る。ここも交通渋滞がすごい。雨も重なって数珠つなぎだ。初日の夜は、事前学習会で中小企業基盤整備機構の八重樫氏のおすすめコースを回った。Banyan Tree Hotel 61階屋上にありバンコクが360度見渡せるレストラン Vertigo で食前酒。雨上がりのバンコクの灯りが川面に映り美しい。その後 MK Gold レストランでタイスキの夕食。肉も魚も野菜も盛りだくさんのタイ式寄せ鍋をタイのビールで満喫した。最後は、チャオプラヤー川沿いの宿泊先のホテルのラウンジ NEXT2 で川面を走る船を見ながらカクテルで乾杯、初日を終えた。

（1）ジェトロバンコク事務所

翌27日午前、ジェトロバンコク事務所で田中一史次長よりタイの概況とアセアン経済について説明を受けた。大洪水後、一時落ち込んだが、自動車産業を中心とした産業集積地として生産拡張が進み、日本からの中小企業の進出もさらに進んでいる。それに伴い、地銀、信金などのサポート部門、外食、会計事務所などのサービス業の進出ラッシュ。自治体のミッションも多い。日本人商工会議所加盟社も1,500社を超え、上海の2,400社に次いで世界2位。在留邦人は5万人とも8万人とも言われる。このほか、親日的な国民性、アセアンの中心地としての地政学的優位性を上げていた。一方、タイ進出企業のリスクとしては、日系企業同士の競争激化、失業率1%以下の完全雇用による人手不足、それに伴う人件費の上昇、洪水などの災害、そして混乱する政治情勢が上げられた。また、若い人の関心は日本よりもKポップに代表される韓流にあり、日本への関心を高める対策が国を挙げて必要とのことであった。

陸のアセアン（ベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ）の中心地として、各地を東西南北に結ぶメコン回廊の整備に伴い、タイの重要性はますます大きくなると感じた。

【ジェトロバンコク事務所 ブリーフィング】



(2) アユタヤ遺跡

その後、アユタヤ遺跡と旧日本人町を視察した。バンコクからバスで約1時間半。途中、パサック川沿いの Krungsri River ホテルでタイ料理のブッフェを取る。家族連れのタイ人のほかに欧米からの観光客でいっぱい。タイ料理というとハーブの利いた酸っぱく辛い味が定番だが、蒸したもち米に甘いココナツをまぶしたデザートもいい。

食後、14 世紀から 18 世紀に栄えた国際貿易都市アユタヤ王朝の遺跡を視察した。多くの寺院遺跡が点在する。その一つワット・プラ・マハタートでは、多くの首を切り取られた仏像が並ぶ。洪水の跡が黒い線となって残っている。菩提樹の根に包みこまれた仏塔の前に立つと、芭蕉の「夏草や兵どもが夢のあと」が口をついて出る。その後、象の背中に乗って王様気分で遺跡を回った。記念写真を撮り終わると、象の鼻が伸びてきて、チップを要求する。よく訓練されているなど感心した。

近くには、約 400 年前に山田長政が活躍した日本人町の跡がある。最盛期には 1500 人もの日本人がいたという。謀反の疑いをかけられ迫害にあい、江戸幕府の鎖国政策で日本人も来なくなり町は消滅した。そこに日本からの援助でできた博物館がある。日本との交流の歴史がよくわかる。その中で琉球との交流の歴史が日本と同列に展示されていた。昨年、ベトナム中部の都市ダナン近郊の日本人町を訪問した時も我らの先祖の足跡が残っていた。レキオス（琉球はそう呼ばれていたらしい）は、東南アジアを舞台に自由に活躍したのだろう。琉球の大航海時代に思いをはせた。

(3) タイ国沖縄県人会

夜は待望のタイ国沖縄県人会との夕食懇談会。会場は、バンコク市内の沖縄家庭料理&民謡居酒屋「金城」。会場へ向かう途中、交通渋滞で前に進まない。100 メートル行くのに 30 分もかかる。恩赦法に反対する反タクシン派のデモの影響らしい。その結果、90 分遅れで会場についた。店内はまさに沖縄。ラフテーやチャンプルーなど沖縄の定番メニューが並ぶ。三線もある。定期的に沖縄民謡ライブショーも行われているとのこと。すでに県人会の皆さんが待っている。タイ国沖縄県人会（仲地省吾会長/本部町出身。日本人で初めてタイの医師免許を取得した日本人専門クリニックの医師）は県出身者や沖縄とのつながりのある人で構成され約 30 名の会員がいるそうだ。その中から懇親会に参加していただいたのは事務局長の山城光氏（THAI KAJIMA/section manager）、山城麻理子氏（THAI KAJIMA）、伊敷悟氏（SIAM STEEL SERVICE CENTER PUBLIC COMPANY LTD./technical manager）、島袋てらす氏（KINDEN THAILAND/project manager）の 4 人。皆さんそれぞれの会社で重要な役職を担っている。日本からの投資は洪水後も増え、建設プロジェクトも多いとのこと。日本食レストランも多くスーパーで日本食も買え、不自由はしないとのこと。タイといえば泡盛のルーツ。ラオカーオというらしい。お店にないというところわざわざ近くのスーパーに行ってくれた。泡盛よりも焼酎に近い。匂いもあり、強い酒だ。この酒が泡盛の源流だと思えば長い歴史を感じる。島袋さんは週末に結婚式で沖縄に帰るとのこと。代表名で祝電を送ることを約束し、うちな一流でカレー（嘉例）と乾杯した。

部屋に戻って、インターネットに接続する。WiFi 環境は整備されている。日本との連絡は全く問題なかった。

(4) 泰国三菱商事・DIA MERCHANDISE CO., LTD.

28 日は、企業訪問と現場視察。泰国三菱商事系列の日本食品卸会社 DIA MERCHANDISE CO., LTD. を訪問。同社の伊藤毅社長、泰 MC 商事中島秀昭食料第二部長より、タイ国の概要及び小売業概況について説明を受けた。食品卸、小売りの現場から見た視点は、实际的だ。タイの地域別の情勢や商売の観点から見た政治、経済、歴史的背景の状況説明と今後の分析は参考になる。人口・経済共にバンコクに一極集中しているタイの小売市場規模は 1.3 兆

パーツ、日本円で約3.9兆円(2011年推定)。そのうち個人商店など伝統的市場が55%、ハイパーマーケットなど近代市場が45%とのこと。比較的外資導入が早かったため、コンビニ、ハイパーマーケットの業態が早くからスタートしている。セブンイレブンは6,300店舗もあり、日本(12,800店舗)に次ぐ、米国(6,600店舗)と同等。実際、角ごとにセブンイレブンがある感じだった。日本企業の小売・外食市場への進出も加速度を増しており、イオン、ユニクロ、大戸屋、丸亀製麺などが進出している。沖縄系では目利きの銀次が出店。沖縄料理を出す店は、ほかにニライカナイが3店舗、金城がある。

昨年赴任した中島部長のご子息が通う現地校の新一年生は400名もいるとのこと。それだけ日本人が増えているのだ。

その後、ハイパーマーケット(大型ディスカウントセンター)のBIG-Cを視察。1階には日本食のレストランもある。2階は食品コーナー、日本食も充実している。お土産にトムヤンクン味のポッキーを買った。

【ハイパーマーケットBIG-C】



昼食は、バンコクで一番おいしい中華料理と評判のメイフラワーで、泰国三菱商事副社長の山川雅広氏も加わり、タイの情勢を聞きながら、歓談した。やはり話題は、混迷する政治情勢。高齢の国王の健康と後継者は誰になるのか。経済成長が続き、中間所得者層も増えているが、農村と都市部の経済格差の縮小が一つのカギとのことだった。

(5) シーポイントタイランド

昼食後、沖縄で圧倒的アクセス数を誇る「ていーだブログ」を運営する(株)ていーだスクエアのグループ会社シーポイントタイランド(C-Point Thailand Corp., Ltd.)による概要説明を受けた。会場は日系人材派遣会社パーソネルコンサルタントの会議室。シーポイントタイランドの伊禮喬太氏(General Manager)及び城間進氏(Sales & Trading Department Manager)からの実践報告は具体的で情熱あふれるものだった。ウチナーンチュの大航海魂を見る思いがした。タイエリアのブログポータルサイト「ナムジャイブログ」の運営や日本食レストランのクーポンマガジンの発行、リアルを試食会とフェイスブックのロコミ活用などを通して、タイの日本食プロモーション界で評価を得ている。最近では日本の地方自治体のフェアをサポートし好評を得ているという。2008年に進出した同社が浮上するきっかけとなったのがタイの大洪水。各地の洪水の情報を取材し、サイトに流し続けたことにより、それが評判になり、サイトへのアクセスが増加し活性化したとのこと。「沖縄のことをやろうと思ったら日本のことを、日本のことをやろうと思ったらタイのことを、タイに必要とされる仕事をしよう」との言葉はとても熱かった。

(6) タイ古典舞踊

夕食は、マンダリンオリエンタルホテル直営のタイ古典舞踊とタイ料理で有名な Sala Rim Naam。前日に引き続き、この日も夕食会場へ向かう途中、交通渋滞だった。バスが全く動かないのだ。反政府デモはさらに激しくなっているようだ。東副代表幹事の機転でバスを降り、BTS(高架鉄道)Asok 駅から Siam 駅で乗り換え Saphan Taksin 駅に向かった。駅構内は切符を買い求める客で長い行列。車内も東京のラッシュ時のようだ。駅前の船着場も行列だ。ホテルレストラン直営のボートでチャオプラヤー川を渡りレストランの船着場で降りた。川沿いのスポットライトを浴びた寺院やホテルのネオンが川面に映り美しい。乗客の中にゲイのカップルが2組一緒にいる。言葉を聞くとロシア語のようだ。人前を気にすることなく肩を抱き合ったりしている。日本では見たことのない様子に、一同びっくりだ。

舞台奥から民族衣装に身を包んだ女性陣が音楽に合わせて現れる。タイ古典舞踊の女性陣の身のこなし、指の動き、衣装の豪華さは本当に磨き抜かれている。洗練されたタイ料理と共に満喫した。ところが男性陣の踊りは、今一步。表情や身のこなしに緊張感がないのだ。何とかしてほしいものだ。

(7) 移動日

翌29日、早起きしてホテルの周辺を散歩する。セブンイレブンに入ると日本の商品が数多く並んでいる。日本とあまり変わらない。交通渋滞がすごい。バイクタクシーがバスやトラックの間をものすごいスピードですり抜けている。バイクタクシーは後部座席に乗客を乗せて移動する庶民の足。道路が込み、小さい路地の多い東南アジアではポピュラーな移動手段だ。ガシャーン！突然大きな音がしたので振り返ると。バイクタクシー同士の衝突だ。幸い運転手も乗客もすぐ立ち上がり、けがもないようだ。

今日はバンコクからミャンマー・ヤンゴンへ移動する日。午前中ボートで川を渡り、アユタヤ時代の創建といわれる黄金の寝釈迦仏を安置しているワット・ポーを見学。足裏には曼荼羅模様の108の図。足裏では記念写真を撮るために行列が出来ている。煩惱を消滅し願を叶えるため108のコインが売られている。このコインを108の皿に1個ずつ入れていくのだが、足りなくなったらどうするのかとつい考えてしまった。

4. ミャンマー

午後、タイ航空でバンコクからヤンゴンへ。飛行機でわずか1時間15分。バンコク・スワンナブーム国際空港に比べると小さくて質素だが、旅行客は多い。入国後、専用車でJICAミャンマー事務所へ向かう。空港から市内まで緑に包まれているようだ。空の青、木々の緑そして金色に輝くバゴダがまぶしい。オリンピックのようなスポーツの看板が目立つ。SEA Games(東南アジア競技大会)が12月11日から開催されるとのこと。バンコクに比べると車は少ない。右側通行の道路を、日本製の右ハンドルの中古車が多く走っている。驚くことにバイクが走っていない。法律でヤンゴンでのバイク通行が禁止されているとのこと。クラクションも鳴り響く。バンコクでは交通渋滞でもクラクションをほとんど聞かなかったのが驚きだ。黄色の袈裟を着た僧侶も多い。町ゆく人の7割がたは男女とも伝統的民族衣装の腰巻ロンジーとサンダルだ。女性や子供は「タナカ」というクリーム(白い粉)を頬に塗っている。日焼け止めと美肌にいいらしい。

予定より早めについたので、事務所のあるさくらタワービル20階のレストランSKY BISTROでコーヒーを飲みながらヤンゴン市内を一望する。欧米人が多い印象だ。ここでもWiFi環境は完備。日本との通信も自由自在だ。

(1) JICA ミャンマー事務所

4時より JICA ミャンマー事務所稲田恭輔次長、割石俊介企画調査員よりミャンマー概要について説明を受ける。直前まで JICA 事業の説明会を開催していたとのこと。毎日のように、このような説明会や日本からの視察団ミッションがあるようだ。当初予定していた田中雅彦所長も他用務で出席できないとのことだった。陸のアセアン最大の国土を有し、タイ、ベトナムに匹敵する 6000 万の人口を有するミャンマーだが、インフラ整備の状況は、カンボジア、ラオス並みとのこと。人間開発指数もメコン地域最低。日本は 2011 年から支援を再開。2013 年は首相訪緬後、3つの分野、生活向上、人材育成、基本的インフラ整備に本格的な支援を開始した。その中心的な役割を果たしているのが JICA であり、その最前線にいるお二人の意気込みを感じた。小学校の入学率は高いが卒業できる人は少ないらしい。それでも識字率が 90%近くと高いのは、仏教寺院の役割が大きいとのこと。また、仏教の寛容さが底辺まで行き渡っている故か、「忘れないが許すの」がミャンマーの国民性、「筋の通った寛容さ」がミャンマースタイルとのことだった。

【JICA ミャンマー事務所 ブリーフィング】



(2) ミャンマー料理

その後地元のスーパーで買い物。お目当ては、JICA 沖縄事務所の若杉さんお勧めのそば焼酎だ。アルコールコーナーの一番下の棚にあった。値段は 2500～3000 チャット。日本円で約 300 円。どんな味が楽しみだ。

夜は、各国の著名人が必ず訪れるという Padonmar Restaurant でミャンマー料理とミャンマーワインをいただいた。服装は、ガイドからいただいたロンジーにすることにした。東さんの提案だ。ロンジーは腰巻スカートのようなミャンマーの民族衣装。男女ともロンジーとサンダル履きが伝統的な衣装だ。ロンジーを身に着け歩くとミャンマー人になった気分だ。もちろんアジアで最もおいしいといわれるミャンマービールもいただいた。東さんから先ほど買ったそば焼酎の差し入れがあった。味は日本と変わらない。この 1 本が何らかのサポートになればと思う。ミャンマー料理はタイに比べるととてもマイルド。香辛料もさほどきつくない。日本人の口に合っているようだ。

(3) ヤンゴン市内・パゴダ

11月30日午前中はヤンゴン市内を視察。まず、ミャンマー仏教の総本山シュエダゴン・パゴダを訪ねた。参拝するには裸足になることが必要だ。境内の入り口で靴を脱いで、エレベーターで昇る。そこから100メートルほど歩くと、荘厳な黄金の塔が現れる。金箔で包まれた塔の上部は6,000個もの宝石で飾られているそうだ。土曜日だからだろうか、老若男女多くの参拝客がいる。東西南北の祈念堂は、有力者が寄進したものだそうだ。それぞれに謂れと特徴がある。自分の生まれ日の曜日と関係のある塔で、香を焚き、花を供え、水をかけて祈りをささげている。生活の中に仏教が生きているようだ。

次に視察したのがヤンゴン最大の市場ボージョー・アウンサン・マーケット。ここで売られているのは、宝石、衣類、木工・漆製品などのほか、少数民族の伝統工芸品。ユニークなのはミャンマーの風景や人々を描いた絵画。視察団員も値引き交渉を楽しみながら、何名かが購入した。トイレ休憩にマーケットの右隣にあるパクソン・デパートに入った。5月にオープンしたばかりの高級百貨店とのこと。海外ブランド品のショップが並ぶ。所得が確実に増大しているからなのだろうか、地元の女性客が目立つ。

アウンサン・マーケットは、ビルマ建国の父、アウン・サン将軍にちなんで名づけられたそうだ。民主化運動の指導者でノーベル平和賞を取ったアウン・サン・スー・チー女史の父親だ。残念ながらビルマが独立を果たした1948年の前年に暗殺されてしまった。独立運動を起こした30人の志士たちと主に日本で訓練を受けている。「面田紋次」という日本の名前も持っている。

ビルマでは、独立ののち、主導権争いが起き、1962年にはクーデターを起こした軍が国を支配するようになった。日本ではビルマというのがよく知られているが、ビルマというのは国を構成する135もの民族のうちの一つ。ミャンマーで69%を占める最大民族だ。そこで1民族の名称ではなく古くから使われているミャンマーを国の名前にした。ビルマ連邦、ビルマ連邦社会主義共和国、ビルマ連邦と続き、1989年ミャンマー連邦となった。この時首都ラングーンもヤンゴンと改名された。そして新憲法による総選挙を2010年に実施し、2011年に軍政から民政に移行し、ミャンマー連邦共和国と変わった。

(4) バゴ

午後は、ミャンマーの古都バゴに向かう。途中、田園沿いのレストラン Bago Kyaw Swa で昼食をとる。中華料理風のミャンマー料理の店だ。ミャンマー風天ぷら、かき揚げがうまい。ウェイターの片言交じりの日本語と笑顔がいい。量が多く腹いっぱいだ。

バゴはヤンゴンから2時間半。13世紀から16世紀にかけて栄えたモン族のパゴ王朝の首都だ。シュエモード・パゴダ、チャイプーン・パゴダ、シュエターリャウン・パゴダを見学した。もちろんここも靴を脱ぐ。

シュエモード・パゴダは、釈迦の遺髪を収めた1000年以上前に建てられた黄金のパゴダ。高さは114メートルでヤンゴンのシュエダゴン・パゴダより高い。地震や災害で何度も建て替えられたそうだ。すべて寄進によって改築されたそうだが、ガイドさんに聞くとミャンマー仏教では生きている間に功德を積むことによって来世でよい人生を送れるという教えがある。寄進をしたり、金箔を貼るのもそのためだという。

チャイプーン・パゴダは、表情の異なる東西南北4面の座仏が鎮座する。建造にかかわった4人の女性のうち誰かが結婚すると仏像が壊れるといわれており、1人が結婚したら西側の仏像だけ壊れてしまったそうだ。結婚したい女性がお祈りに来るのだろうか？とガイドに聞いたが、答えは聞けなかった。

シュエターリャウン・パゴダは「ビルマの堅琴」の背景となった全長55メートルの巨大な寝釈迦仏。英国植民地時代に発見されるまで密林の中に眠っていたそうだ。ロンジー姿の比嘉事務局長を「水島〜！」と皆で呼び合った。

朝からこれでもかと続くバゴダめぐりで、少し食傷気味だったが、パゴダこそが国の源であり、誇るべき観光施設なのだろう。

（５）象使い

夜は、宿舎のホテル近くの Karaweik Palace でミャンマー舞踊を見ながらミャンマー料理のビュッフェをいただく。入り口ではミャンマー美人がお出迎え。ミャンマーの舞踊もタイの古典舞踊と似ている。仏法説話や建国の物語を題材にしている。手足の運び、指のしなやかな動き、実に見事だ。孔雀や蓮の花をテーマにした踊りもある。面白かったのは象の踊りだ。象のいろんな動きを本物そっくりに行う。ミャンマー版獅子舞だ。最後は、舞台からホールに降りて客席を回る。団員の伊野波盛久氏が即興で象使いを演じ、観客から拍手喝采を浴びた！楽しいひと時だった。

意外に思ったのは観客に黄色の袈裟を着た僧侶の姿があったことだ。同僚の僧 2 人と歓談しながら食事をしている。携帯でメールもしている。国民の尊敬を集める僧は清貧の生き方をしているとばかり思っていたものだから、つい見つめてしまった。僧侶にもいろんな人がいるものと思った。

【ミャンマー料理店で象使いを演じる】



（６）ティラワ経済特区

12 月 1 日、朝、シャワーを浴びていると停電があった。1 分ほどで復歸したが、その後ももう 1 回あった。電力不足で停電もよくあるといていたが本当だった。

木々の間を鳥が舞い、リスが飛び回るホテルの庭でミャンマー麺の朝食をとる。片言の日本語ととびっきりの笑顔で迎えてくれるウェイトレスの風貌は、どこかウチナーンチュに似ている。爽やかな視察最終日だ。

今回の視察研修の目玉の一つであるティラワ経済特区を視察した。民主化のミャンマーを、日本が官民挙げて開発を支援する象徴ともいうべき特区だ。ヤンゴンの南東約 23 キロ、車で 1 時間ほどにある。2,400 ヘクタール（東京ドーム 23 個分）の土地を製造業や商業用地用に、外国企業の進出拠点として 2015 年の開業を目指している。丸紅、三菱、住友に加え JICA も出資する予定だ。丸紅ヤンゴン支店長の黒田浩司氏、同インフラ・開発建設長で現場責任者の弘中正俊氏、ANA ヤンゴン支店長本宮重人氏に同行していただいた。前日に同特区の起工式があり日本からも多くの方が出席して盛大に催されたとのこと。

開発地区には、整備されたばかりの大きな道が 1 本。周辺は田園地帯。乾季のためか雑草が生い茂る。掘立小屋みたいな民家が点在するが電気も通ってないようだ。現地住民の

立ち退きや電力、水、道路・橋梁などインフラ整備も急務。環境に配慮した開発をどう進めるかなどの問題もある。あとわずか2年で第1期の分譲が始まる。概要説明する担当の弘中部長の並々ならぬ決意を感じた。

その後バンコク市内に戻り、昼食を取りながら丸紅黒田支店長、ANA 本宮支店長からミャンマーの経済概況や日緬の観光動向の説明を受けた。会場はThe Governor's Residence。欧米からの観光客が利用する英国コロニアル風のホテル内のレストランだ。マイルドなミャンマー料理で日本人の口にもよく合うと評判だそうだ。特にミャンマーの代表的料理モヒンガーは絶品だった。米粉の麺に鯰の出し汁をかけた料理だが、麺のゆで加減と程よい甘辛のスープのバランスがよく、今回の視察研修で最も記憶に残る料理だった。

丸紅の黒田支店長からは、JETRO ミャンマー事務所の資料に基づいて経済概要について説明があった。ミャンマーは日本の50年前にタイムスリップしたようだ。映画「3丁目の夕日」に描かれる世界だ。50年前はバンコクからラングーンに買い出しに来たほど繁栄していたが、長い軍事政権下で時が止まってしまったのだ。2年前の民主化以来、時が動き始めたのだ。社会インフラ・金融の整備から豊富な天然資源の開発、農・漁業の振興、人材育成など課題は山積している。発展途上国の開発支援で実績のある商社が果たす役割は大きい。

ANA 本宮支店長からは、ヤンゴン支店の設置の経緯や日緬間の国際便の便数・搭乗率の増加の推移、韓国の観光客の状況などについて説明があった。機材も大型化し週7便に増便するなどミャンマーへの関心の高さがうかがえる。韓国はさらにその上に行く。ミャンマーから日本への渡航者が5千に対し韓国は7万人である。韓国の国を挙げての「韓流」浸透作戦は、確実に実を結んでいる。

（7）ヤンゴン市内散策

食後、時間があつたのでまたまたパゴダの見学だ。全長70メートルの寝釈迦仏がまつられているチャウト・ジー・パコダを訪ねた。大きな睫毛と切れ長の瞳が印象的だ。色っぽいという失礼かもしれない？が、日本の仏像より人間的だ。もちろんここも裸足だ。多くの参拝客が、読経したり、瞑想したり、横になったり、各人各様の参拝スタイルだ。若者が7〜8名でお札を数えながらモアイらしきことをやっているグループもいる。仏教が生活の一部として根付いているのを感じた。

その後、ヤンゴンの「109」といわれるジャンクションスクエアを見学した。人気の男性ボーカルグループがサイン会を開催していて、店内は大盛況。10代の女の子の歓声がキャーキャーと響く。ここでは若者の服装もジーンズ、ミニスカート、茶髪と日本と変わらない。伝統のロンジースタイルが少ないくらいだ。ファッションも過渡期にあるのだろう。

（8）アウンサンスーチャー

ミャンマー最後の夜は、アウンサン将軍ゆかりのHouse of Memoriesで食事会。アウンサン将軍が執務をとった英国植民地時代の建物だ。将軍が使ったとされる机に座り在りし日をしのんだ。誰からともなく「埴生の宿」を口ずさむ。「ビルマの豎琴」で水島上等兵がメロディを奏で、隊員が合唱する曲だ。その情景を思い浮かべながら、玉城代表幹事の迫力あるテノールとリードで大合唱となった。

（9）帰国の日

翌2日、帰国の日だ。ホテルをチェックアウト後、アウンサンスーチャー女史の邸宅を見学して、ヤンゴン空港に向かう。市内から30分ほど、インヤー湖畔にある。見覚えのある門が見える。長年軟禁されていたスーチャーさんが記者会見をして世界中のテレビで放映さ

れた場所だ。現在、スーチーさんは、国会議員として首都ネピドーにいる。主不在の邸宅はひっそりとして、門も閉じられている。隙間から邸宅が見える。ここからミャンマー民主化の波が起こったのだ。

ちなみにミャンマーの人々の名前には姓がないのだそうだ。スーチーさんの名前も父親と母親の名前をとって付けられたとのことだ。アウンサンが姓でスーチーが名前ではないらしい。アウンサンスーチーで一つの名前だ。こんな文化の国もあるのだと感心した。そういえば、ミャンマーへのビザ申請で父親の名前を記入する欄があった。それも姓がないことから、身分証明するために必要だからかもしれない。女史の邸宅の前で記念撮影をして、ヤンゴンに別れを告げた。

【アウンサンスーチー邸宅前】



ヤンゴン空港でのチェックインは思いのほか時間がかかった。入国の際はスイスイだったのと対照的だ。ファーストクラスとエコノミーの差が大きく、係員の対応も雲泥の差。ファーストクラスは見るからに富裕層といった感じの旅行者が多い。ところがファーストクラスを案内する係員の対応が気分しだい。チケットを確認もしないで服装で判断するのだ。エコノミークラスはやたら時間がかかる。出稼ぎで初めて海外に行くのだろうか、地方出身者らしいミャンマー人が多い。タイではいわゆる3Kの仕事はカンボジアやミャンマーからの出稼ぎが多いとの話だったが、その通りだと感じた。なんと6,000万人の人口の1割600万人が出稼ぎに出ているとのことだ。仮に毎月の仕送りを1万円とすると、1万円×600万人=600億円が毎月入ってくる計算になる。これが実はミャンマーの本当の力かもしれない。

無事出国審査も終え、搭乗前に解団式を行った。団員それぞれが、視察の成果を確認し、アジアの熱気を感じたようだ。台北経由で無事那覇到着。全員、健康・無事故で帰沖した。

5. 終わりに

今回は、アセアンメコン流域5か国の中で、日本企業が最も進出しているタイとアジア最後のフロンティアといわれるミャンマーという対照的な2か国を訪問した。ASEAN諸国は2015年までにASEAN経済共同体を形成し、物品、サービス、投資、熟練労働者の自由な移動と資本のより自由な移動をめざしている。人口6億余りの巨大な市場が誕生する。中でもメコン流域5か国は、タイを中核として周辺のベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマーが東西、南北の回廊で結ばれ、より一体感を増すだろう。

タイは、リーマンショック、大洪水の危機を乗り越えV字回復を成し遂げ堅調に成長している。投資環境の良さはアジアで最も進んでおり、整ったインフラ、自動車を中心とし

た幅広い産業集積は、魅力的である。政治的不安要素を考慮に入れても、これからもサービス業を中心としてさらに日本企業が進出していくだろう。

ミャンマーはまさにこれからという感じがした。世界中の注目が集まり、ミャンマーブームといってよいほどの過熱ぶりである。温厚で勤勉な国民性と豊富な若い労働力。天然ガスや水産資源にも恵まれている。また、中国 13 億市場とインド 12 億市場の間にあり、その仲介役も期待できる。事業機会の芽がいたるところにある。タイの 50 年にわたる日本企業の 5S や TQC などの改善運動が根付いていることと比べると、鎖国が解けて民主化の道を歩み始めたよちよち歩きの段階だ。これからのかじ取りが期待される。

今回注目したのは若者のファッションだ。バンコクとヤンゴンの最先端のショッピングセンターを視察したが、両市の若者のファッションは、T シャツにジーンズに茶髪、ボーカルグループに熱狂し、携帯メールを使いこなす。両国は、仏教が社会の基礎を構成し、気候風土や価値観も似ている。両国やアセアンの若者が共通項を持ち始めてきているのではないか？アジア均一化の時代が近づいているのかもしれない。

韓国の韓流文化普及作戦は、着実に成果を出しつつある。日本も海外に向けてクールジャパンを発信する感性文化普及作戦を早急に展開しないと、20 年後日本の地位はさらに低下するのではないかと危機感を持った。ビジットジャパン運動をさらに積極的に進め、東南アジアからの日本へのビザ取得要件を緩和するなど、アジアから多くの観光客を呼び込むことが必要だろう。

また、思いやりの心や気候風土などアセアンと類似性の多い沖縄が、日本とアセアン諸国の成長と発展の要になることをさらに強く感じた。そのためにも、まずこちらから出向く。現地に「飛び込む」ことが最も必要だと感じた。

以上

5. 視察先別の報告

【タイ】

(1) ジェトロバンコク事務所 沖縄経済同友会 事務局次長 石垣 卓哉

ジェトロバンコク事務所を訪問し、田中一史次長に、『タイの概況とアセアン経済』について説明をしていただいた。

1. タイの概況

タイGDP成長率(%)の推移

2010	2011	2012	12/2Q	3Q	4Q	13/1Q	2Q	3Q
7.8	0.1	6.5	4.4	3.1	19.1	5.4	2.9	2.7
—	—	—	(2.5)	(1.6)	(3.0)	(▲1.6)	(0.0)	(1.3)

() 内は季節調整済前期比

(出所) タイ国家経済社会開発庁

- ・2012年は、洪水後の消費や投資の増加などにより+6.5%となった。
※2011年は9月のアユタヤ洪水により一時的に落ち込んだ。日本企業も約450社が水浸しになる被害を受けた。
- ・2013年は前年の高成長の反動により、季節調整済前期比では1Qで▲1.6%、2Qで0.0%、3Qで1.3%と2期連続でマイナス成長またはプラスマイナスゼロ成長となっており、景気後退時期となっている。

自動車製造台数(千台)の推移

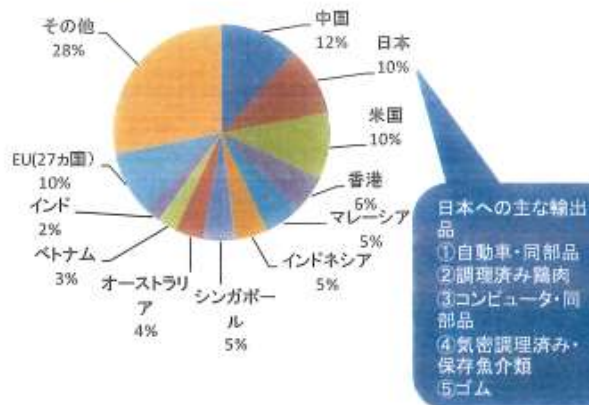
2010	2011	2012	2013.4	5	6	7	8
1645.3	1457.8	2440.0	170.4	231.0	217.0	201.0	195.0
(64.6)	(▲11.4)	(67.4)	(17.4)	(13.9)	(4.0)	(▲6.0)	(▲8.2)

() 内は前年同期比(%)

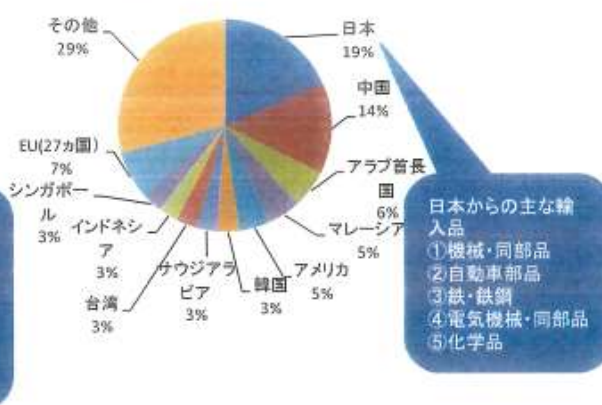
(出所) タイ中央銀行、タイ工業連盟

- ・タイの一大産業である自動車産業において、**2012年自動車製造台数は過去最高の245万台を達成(世界第9位、初のトップ10入り)**した。2011年の洪水影響による待機および復興需要、内需刺激策(税還付、最低賃金引き上げ)がプラス要因となったが、足元はファーストカーバイヤー税還付制度終了の影響で減少傾向となっている。
※2012年自動車製造台数ランキング(国際自動車工業連合会より)
1位: 中国(1,927万台)、2位: アメリカ(1,033万台)、3位(日本: 994万台)、
4位: ドイツ(565万台)、5位: 韓国(456万台)、6位(インド: 415万台)、
7位: ブラジル(334万台)、8位: メキシコ(300万台)
- ・自動車製造の約9割が日本メーカーで、その半数はトヨタが占める。現在、日本での製造台数は減産傾向にあり、日本としては勝負をかけるためにタイに進出した。
- ・タイ国内での需要の他に、中近東やオーストラリアなどへの輸出拠点化している日本自動車メーカーが多いとのこと。

タイの輸出主要国(2012年)



タイの輸入主要国(2012年)



- ・タイの経済は輸出に左右されている。タイの輸出は、ASEAN、アメリカ、EU、日本、中国と輸出先がシェア 10%~12%とバランス良く分散されている。どこかの国の経済が悪くなっても他の国が良ければバランスが取れる構造となっている。輸入に関しては、過去から日本向けがトップで、日本が最大の貿易相手国（輸出+輸入）となっている。

【高速道路から撮影したトヨタ自動車の看板】



入域観光客数（千人）の動向

2011	2012	2012 上期	2012 下期	2013 上期	7 月	8 月
19,230	22,313	10,619	11,694	12,744	2,224	2,469
(20.7)	(16.0)	(8.9)	(23.4)	(20.0)	(22.5)	(28.1)

() 内は前年比、前年同期比 (%)

(基データ) タイ観光協会

- ・入域観光客数は前年比で2桁増が続いており、特に中国観光客が増加している。
- ※タイ政府では観光産業を国としての重要産業と位置づけ、近年、観光産業に非常に力を入れている。
- ※2012 年入域観光客数
 1 位：中国 (279 万人)、2 位：マレーシア (256 万人)、3 位 (日本：137 万人)、
 4 位：ロシア (132 万人)

⇒4位のロシアについて

ロシア人にとってはタイは南国の楽園であり、寒いところから暖かいところへ、多くはビーチ・リゾートに行くそうである。

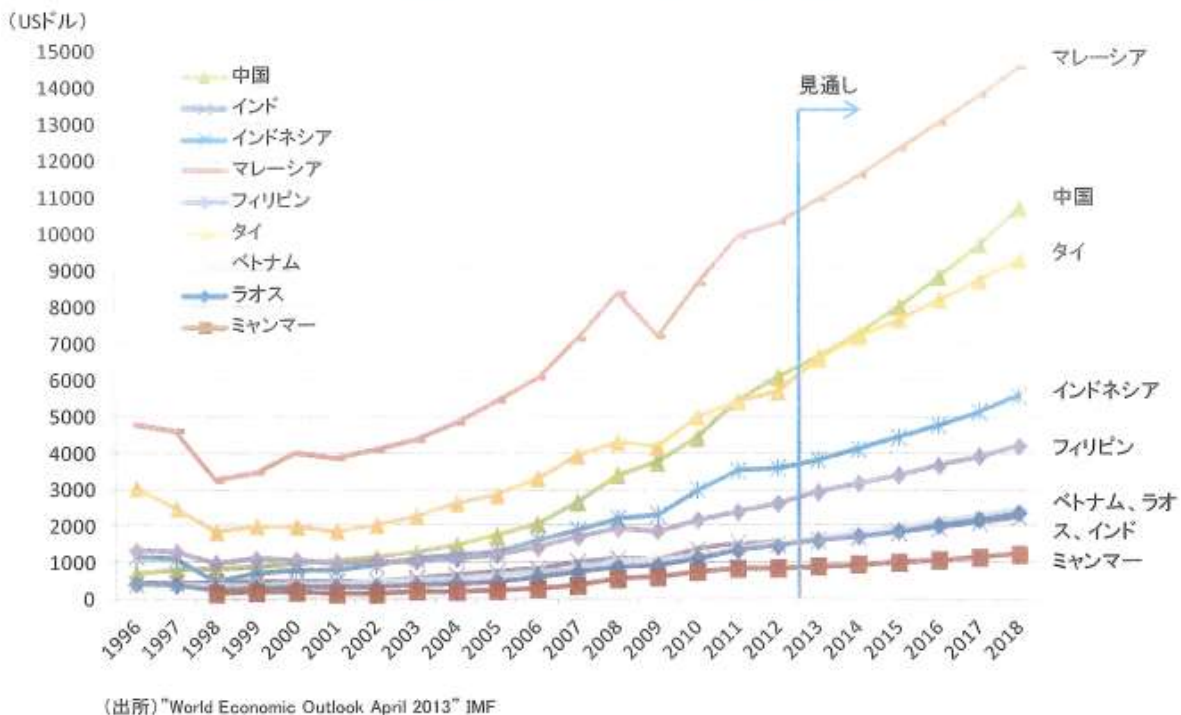
- ・個人的な所感として、バンコクのような近代的な都市、またリゾート地が数多くあるほか、仏教徒の国としての独特の文化やアユタヤ遺跡のような世界遺産などタイ国は大変魅力的な国だと感じた。ジェットロ訪問後は、アユタヤ遺跡、旧日本人町を視察、翌日夕食ではタイ古典舞踊を鑑賞し直にタイ文化に触れた。また、体験者からは心をリラックスさせるタイ古式マッサージも魅力的であったとの声もあった。実際、タイに行ってわかったことは、この国の文化、伝統や歴史を外国人向けの観光産業へとマッチさせてうまくアピールさせているようであった。

【タイ古典舞踊を鑑賞しながらの夕食】



2. アセアン経済概況

アジア各国の一人当たりGDPの推移



主要各国の世帯当たり耐久消費財普及率(2010年)

(単位: %)

国・地域	一人当たりGDP (USドル)	カラーTV	携帯電話	冷蔵庫	洗濯機	カメラ	エアコン	パソコン	DVD機器	乗用車	二輪車
オーストラリア	65,477	99.3	91.7	99.9	96.8	90.8	71.2	84.1	85.5	87.9	13.5
シンガポール	49,271	99.5	99.8	99.1	97.0	89.9	77.4	83.5	60.9	40.5	6.8
日本	45,920	99.4	94.4	98.8	99.6	85.3	88.2	87.0	76.1	86.5	19.6
香港	34,049	99.6	99.4	99.8	95.3	92.0	84.0	78.7	95.3	21.0	32.1
韓国	22,778	96.7	98.8	99.7	98.8	95.5	51.8	98.7	41.6	68.2	40.1
台湾	20,101	99.7	99.6	99.9	97.5	96.7	88.8	71.7	42.0	59.9	83.0
マレーシア	9,700	98.4	94.5	85.4	92.7	96.8	27.1	44.5	39.9	62.2	52.5
中国	5,414	96.6	89.8	71.3	73.1	23.4	55.8	33.3	40.9	4.7	39.9
タイ	5,394	92.7	82.0	88.3	52.7	82.9	14.0	25.1	35.0	13.8	71.2
インドネシア	3,509	70.4	49.4	28.7	28.9	15.7	7.0	7.8	4.8	7.1	9.8
フィリピン	2,223	72.4	79.3	40.5	31.9	68.9	11.7	15.8	21.4	10.6	31.3
インド	1,389	63.6	37.3	19.4	6.9	5.1	6.4	7.7	2.6	3.9	24.2
ベトナム	1,374	91.8	32.2	39.5	16.4	5.2	5.6	14.3	6.8	1.2	74.1
アジア大洋州計	-	84.2	69.6	55.4	50.5	26.0	36.3	27.8	27.6	12.4	32.9

(注1)普及率50%未満の消費財は、赤かつ下線かつ斜体で表示

(注2)一人当たりGDPは名目

(出所)IMF "World Economic Outlook April 2012", Euromonitor International(2011年11月閲覧)

- ・タイは中国と同等で、アセアンではシンガポール、マレーシアに次ぐアジアの中心国となっている。1人当たりのGDPが5千ドルを超え、中進国のトップ集団を走るところまでに成長している。今後、日系企業が提供する製品・サービスでの需要に期待がかかる。
- ・カラーTV、冷蔵庫などの普及率が高く、白物家電は売れていない。買換需要によるものが大きい。バンコクは渋滞が激しいにも関わらず、乗用車の普及率は13.8%と意外と低い。今後はインド、ベトナムなどタイより所得が低い国は売れるのではと思う。

【バンコクの渋滞状況】



◎日系企業の進出について

現在、約8千社の日系企業がタイに進出している。バンコク日本人商工会議所会員数は1,506社となり、上海の2,400社に次いで世界2位となっている。日系企業の進出に伴い、地方銀行や信用金庫など（例えば、広島銀行、福岡銀行）も進出している。

製造業と非製造業で半々、製造業での主な業種では、金属製造・加工、輸送用機械、電気機器がある。非製造業では、卸売、サービス業、運輸・倉庫業、建設業があり、活動領域は広範囲にわたる。製造業では、自動車関連進出層の厚みが反映されている。

タイ進出の背景には、整備されたインフラ、人件費の安さ、親日的な国民性、地政学的な優位性がある。タイの人件費は1日の日給の最低賃金が800円程度で、日本でアルバイトの1時間分の時給で、タイでは1人の日給を補う計算となる。また、タイはメコン経済圏の中心に位置しており地政学的なメリットがある。タイ進出のリスクには、同業日系企業同士の競争激化、失業率1%以下の完全雇用による人手不足（自動車産業をはじめ、特に製造業で単純労働者、技術者等の不足感）、人件費の上昇（人材不足状況下で最低賃金の大幅アップ）、洪水等の災害リスク、が上げられた。

視察帰国後、確認したところ、タイでは2年前の大洪水後にも関わらず、日系企業による直接投資は増え続け、工場が操業再開し復旧が着実に進んだようである。日系企業の海外ビジネスに大きな影響を与えリスクとも言えたが、インフラや優遇措置が充実するタイの優位性は、リスクの存在を考慮に入れても揺らぐことなく、自動車製造の約9割が日本メーカーであるタイでは、アジア諸国への輸出拠点として存在感を増しているとのことであった。

【ジェトロバンコク事務所】



（２）タイ国沖縄県人会との懇親会 沖縄経済同友会事務局次長 石垣 卓哉

タイ国にて活躍している沖縄出身の方々との交流を目的に、タイ国沖縄県人会と懇親会を行った。（会場：沖縄家庭料理&居酒屋「金城」）

タイ国沖縄県人会は平成6年1月に設立。現在の会員数は約30名で、年に2回総会を開催している。また三線大会などを開催し会を盛り上げている。今回、県人会事務局長である山城光氏をはじめ、計4名が参加された。会員のほとんどが会社勤務（転勤組）。

今回は参加していませんが、県人会会長である仲地省吾氏は、平成19年に日本人として初めてタイの医師免許を取得し、現在はバンコク市内病院内の JMS（Japan Medical Service：日本人専門クリニック）で在留邦人や旅行者の外来診療をしているそうです。

【参加者】山城光、伊敷悟、島袋てらす、山城麻里子 以上4名（敬称略）

【タイ国沖縄県人会との懇親会】



沖縄家庭料理&居酒屋「金城」は
バンコク唯一の沖縄家庭料理



この日はバンコクで反政府デモがあり、その影響で渋滞し県人会の皆さまを1時間以上待たせてしまいました。

100m進むにも20～30分かかるほどでした。

(3) DIA MERCHANISE CO., LTD (三菱商事系日本食品卸売会社)

(株)琉球銀行 執行役員地域第二部長 伊野波 盛久

DMC社を訪問し、伊藤毅社長(同社)および中島秀明食料第二部長(泰国三菱商事)に『タイ王国の小売業概況等について』ご説明いただいた。

※山川雅弘副社長(泰国三菱商事)は昼食会から参加

生活産業グループ

(概要)

生活産業グループは、食料、繊維、生活物資、ヘルスケア、流通、小売りなど、人々の生活に身近な分野で、原料・素材の調達から、消費市場に至るまでの幅広い領域において、商品・サービスの提供、事業開発、投資などを行っている。

当グループの強みは、川上の原料調達から、川下の小売り・外食産業に至る領域まで、バランス良く事業展開している。国内外にある事業投資先・関係会社を通じて、総合力をさらに強化しながら消費者により豊かなライフスタイルを提供し、社会に貢献していくことを目指している。また、消費者に身近な商品・サービスを取り扱うグループとして、「食の安全」や「環境問題」などには高い意識を持って取り組んでいる。

(戦略)

新興国の経済発展や人口の増加、バイオ燃料の需要増によって、食糧資源などの一次産品の世界的な需要バランスが大きく変化しており、資源調達への競争が激化している。一方、消費市場においては価値観やライフスタイルの多様化が進み、消費者のニーズに迅速且つ的確に対応することが求められている。このように、当グループを取り巻く環境は刻々と変化しているが、「バリューチェーンの川上から川下に至るバランスの良い事業展開」という当グループの強みを生かし、一次産品の調達能力のさらなる拡大や、流通・サービス機能の拡充により収益基盤を一層強化するほか、成長が見込める海外市場においても事業展開を積極的に進め、持続的な成長を目指している。

1. タイ小売業の概況

タイは、他の東南アジア各国より比較的早く外資が参入しており、コンビニ、ハイパーマーケット等の業態も早くからスタートし、セブンイレブンは、日本(約12,800店)に次ぎ、米国(約6,600店)とほぼ同規模6,276店舗の出店となっている。

2. タイ小売り・外食市場への日本企業の進出

バンコク都内の和食レストラン・飲食店数：約1,650店

A E O N 45店舗 ファミリーマート 約650店舗 大戸屋30店舗
(ユニクロ 5店舗)ほか

タイは「外食」市場が極めて大きく、内食は小さいのが特徴である。タイ人の日本食嗜好と日本人の人口増加等により飲食店市場及び量販店の惣菜類が伸張している。

在留邦人 約50千人(現在80~100千人) 日系企業 1,470社

日本人学校 今年の新一年生 430人 (14クラス)

【バンコク市内百貨店にある日本食飲店】



3. 課題

物流インフラが未成熟であり、チルド物流や高頻度の配送は困難である。インフラ整備の中で、慢性的な交通渋滞の抜本的な改善・見直しが急務である。

4. タイ・ミャンマー海外視察感想

中小企業のアジア進出が広がるなか金融機関が先導役となって、海外進出に関連した情報の提供・相談の対応等、ビジネスチャンスを提供する役割が強く求められている。今回の視察は、JETRO（日本貿易振興機構）JICA（国際協力機構）と三菱商事・シーポイントほか企業の駐在事務所等、と連携した豊富な情報提供で、充実した視察メニューであった。中国への投資環境が変化する中で、タイ・ミャンマー（ASEAN）新興国の経済成長の熱気を体感することができた有意義な視察であった。

【DMC社（同社所在ビルのルンピニタワービル1階にて）】

右写真はDMC社訪問後に市場視察したBIG-C（ハイパーセンター）の店内風景



(4) (株)シーポイントタイランド (株)ていだスクエア グループ会社)
(株)おきぎん経済研究所 代表取締役社長 出村 郁雄

1. はじめに

(株)シーポイントタイランドは、成長著しい東南アジアの中で現在最も存在感のある国、タイの首都バンコクにおいて、日本食レストランの誘客プロモーションや、日・タイ間の観光プロモーション、企業進出サポートを中心に業務を展開する日系企業です。同社は沖縄県内で圧倒的なアクセス数を誇る「ティーダブログ」を主催する(株)ティーダスクウェア（浦添市牧港）と兄弟会社であり、伊禮氏、城間氏という純ウチナーンチュが地元タイ人の若い社員とともに運営しています。

同社は、タイの日本食プロモーションの世界においては既にかかなりの存在感を有しており、タイ語によるブログ運営や日本食情報誌の発刊、テイスティングパーティ（試食会）とソーシャルネットワークを活用したプロモーション活動を通じ多くのタイ人を日本食レストランへと導いています。また、そのネットワークの強みを活かし、(彼らのふるさと)沖縄の食材をタイへ導入する地道な営業活動も展開しています。

沖縄経済同友会ではタイにおける日本食市場の現況確認と、沖縄の食品展開の可能性を探るべく、バンコク市内の同社を訪問しました。今回はバンコクでの同社の日本食プロモーションを中心にレポートします。

2. バンコク日本食事情

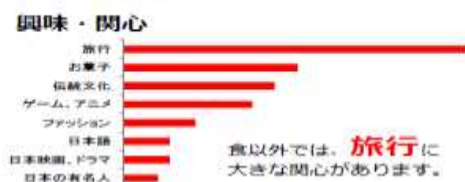
バンコクには日本食レストランがすでに 2000 軒近く存在している（同社推測）といわれており、この数はアジア全体における日本食ブームを反映し、特にこの 1～2 年で急増しているとの事。

バンコクにはすでに 10 万人とも言われる日本人が居住しているといわれており、日本食のマーケットは以前から存在しますが、最近の急激なマーケット拡大は主に現地タイ人の日本食志向の強まりが背景にあるとの事です。従来、貧富の差が激しいといわれてきたタイですが、中間所得層の増大とともに、高級とされてきた日本食に対する一般タイ人の関心が徐々に高まり、最近のアンケート調査では日本食の人気は地元タイ料理に続く第2位の位置を占めている、との事です。タイ人の経営する日本料理店が地元のタイ人をますます日本料理に引き寄せ、マーケットを拡大させているのです。

Q.メイン利用者層は？

日本食が好きな20代～30代女性会社員

比較的所得に余裕がある。バンコク近郊在住20代～30代の女性会社員がメイン利用者です。



日本食レストラン例：ゲートウェイエカマイ



3. タイにおける最強の日系ポータルサイトを運営

同社は2008年8月に、タイエリアのブログポータルサイト「ナムジャイブログ（ナムジャイとはタイ語で思いやり、という意味）」という、在タイ日本人やタイ旅行好きの日本人、日本が好きなタイ人を対象としたサイトを開設しました。現在では一日35000ページビュー、月間訪問者で12000人、タイで圧倒的アクセス数を誇る日系最大かつ唯一無二のポータルサイトに成長しています。

その後、タイ国内初となる日本人対象のタイ料理店紹介サイトや、いまや同社の主力業務となったタイ人向け日本料理紹介サイト「JGB (Japanese gourmet Bangkok)」を開設、現在契約店舗102店舗、月間訪問者数80,000件を誇るタイ唯一のタイ語版日本食ポータルサイトとしてタイ人、タイに住む日本人から圧倒的な支持を得ています。



(ナムジャイブログと、情報誌)

4. 独自のプロモーションで誘客活動

勿論、彼らも最初から順調に行ったわけでは当然ありません。ポータルサイト立ち上げ当時は極度の不振に喘いだそうです。そして、意外にも、サイトが活性化するきっかけとなったのは、2011 年、タイで発生した大洪水だったそうです。かれらはボランティア精神で各地での水害の情報を取材、その情報をサイトに流し続けました。その情報をサイトユーザーは熱心に活用し始め、彼らの活動がユーザーの共感をよび、サイトへのアクセスがどんどん増加、サイトが活性化されてきたそうです。

そして彼らが独自に考案したプロモーション手法が話題を呼びます。その手法とは、リアルの試食会とソーシャルネットワークを合わせたプロモーション活動です。バンコクは世界一、ブログの発達している地域である、それを利用しない手はない、との確信から、特にフェイスブックを愛用しているビジネスマン、オフィスレディを中心に試食会を開き、その評価をフェイスブックに書き込んでもらい、そして友達から友達へ、口コミで情報が伝わるようにしたのです。

その企画は見事に的中しフェイスブックの口コミによる誘客活動は彼らの予想以上の反響があり、日本食レストランを中心に話題となり、現在ではほぼ毎週、どこかの日本食レストランで彼らの主催する試食会が開かれているとの事。併せて日本食に関する情報誌（J G B coupon magazine）を 2013 年 4 月に創刊、現在月間 25000 部を発行しタイ人の個人家庭や日系企業に配布、かれらのプロモーション活動の一翼を担っています。



タイ人15人串カツ試食会(JGB)

JGB試食会企画開始



5. 全国各地公体、独自の売り込み

かれらの活動は、単に日本食のプロモーション活動に限定されない。その活動の代表的な事例が神奈川県（黒岩知事）の主催するタイでの同県の総合プロモーション（観光、県産品）を主催したことであろう。「型どおりのパターンではなく、地元タイ人の若い人を集めたプロモーションを行いたい」。神奈川県黒岩知事の強い意向があり、タイでの彼らの活動の評判を聞きつけた同県の関係者から彼らにプロモーションを主催する白羽の矢が当たったとの事。

同社は、日本食レストランで培ったリアル試食会のノウハウを活かし、同イベントに 100 人以上のタイ人オフィスレディ、ビジネスマンを集客しプロモーションを大盛況に導いた。彼らの手作り感のあるプロモーションは黒岩知事から絶賛され、感激した黒岩知事は頼まれ

もしないのに、タイ人参加者の各テーブルを乾杯して回るなど、神奈川県プロモーションは感動と大盛況のうちに終了したそうである。また、静岡県浜松市は、市長自ら観光誘客イベントで来年1月に来タイ予定、当然、同社がプロモーションを担当する予定です。ちなみに沖縄県も2014年2月後半にコンベンションビューロー主催のタイ観光プロモーションを実施する予定、との事。大いに期待したいものです。

彼らはこのように地道にバンコクの日本食レストランの様々なニーズを充足させるだけでなく、ネットとリアルな活動を併用したさまざまなプロモーション活動を通じて「日本」をタイ市民へむけ発信、マーケットリサーチ力を強化、バンコクでの総合的な販売促進プロモーターとしての実績作りに懸命に取り組んでいます。全国の各自治体もタイの元気を地元経済に取込もうと、積極的に活動しています。



神奈川県トップセールス

神奈川県の黒岩知事来タイに伴うトップセールス。タイ人ブロッガー、ソーシャルメディアユーザー、メディア、旅行会社の方約100名をお招きし、手巻寿司体験、クイズ大会等のイベントを行いました。



(手前の黄色いハッピーが城間氏、ナムジャイのマーク持っている人は黒岩神奈川県知事)

6. まとめ

今年7月のタイ人へのビザ発給緩和をきっかけに、日本へのタイ人観光客が急増しています。古い伝統を誇り、国民より深い尊敬を集める王家(ラーマ9世プミポン国王)が存在し、熱心な仏教国でもあるタイと日本は共通点も多く、タイは以前から大の親日国でもあります。

中間所得層が急速に拡大しているタイでは海外旅行ブームが広がりを見せており、日本はタイ人が「行ってみたい国」の上位に位置しています。わが沖縄県と、タイとの直行便の計画も進捗中、との情報もあり、国は外国人観光客数を2030年に3千万人と目標を掲げ、国を挙げてわが国の観光振興を進めていく計画です。アジアへの最前線にいる観光立県沖縄には、大いなるフォローの風が吹くのは間違いないところでしょう。人が移動すればモノも動く。この法則からすれば、タイのマーケットは沖縄の産品を売り込む市場としても有望ではないでしょうか。すでに2000店舗近くの日本食料理店があり、うちな一料理店も数店舗、進出しているバンコクなら、沖縄サイドのやる気と努力さえあれば「うちな一食」が普通にバンコクに流通する日も近いのではないのでしょうか。ちなみに城間氏は、「うちな一食品」、泡盛の「営業代行」も行っている、との事。コストをかけず手っ取り早く、自社製品をタイの日本料理店に売り込む意外な近道ではないのでしょうか。興味のある方は同社へ。

成長するタイの日本食市場、その最前線で活躍する(株)シーポイントタイランドの伊禮、城間両氏をはじめとするウチナンチュの活躍から今後も目が離せません。

【パワーポイントスライドによる説明】



【訪問後の集合写真】

パーソナルコンサルタントのフロアを手配いただき、ご説明いただいた。



【ミャンマー】

(5) JICAミャンマー事務所 (株)沖電工 取締役保修部長 武島 貞夫

JICAミャンマー事務所を訪問し、稲田恭輔次長、割石俊介企画調査員に、『ミャンマー開発の今と今後の方向』について説明をしていただいた。

1) ミャンマーの現状

メコン諸国との比較 (2011 年度)

国名	ミャンマー	カンボジア	ラオス	タイ	ベトナム
人口 (万人)	6,242	1,431	629	6,951	8,784
GDP (百万ドル)	51,930	12,875	8,298	345,650	123,961
一人当たり GDP (ドル)	832	900	1,320	4,972	1,411

メコン諸国との比較でGDPはタイの約15%、ベトナムの約40%で、一人当たりの所得はメコン諸国で最貧であり、大陸部ASEAN最大の国土を有するミャンマーは、道路、航空、水、電力等のインフラ整備はカンボジア、ラオス並みであり、特に電力は電化率26%、ヤンゴンでも6割と低く、又、送配電ロス率は26.7%と極めて悪く（ラオスで12.0%、タイが5.9%）計画停電等もあるとのことでした。

マクロ経済の状況は、2000年のガス田運開以降、タイ等への輸出で一定の外貨収入を得て、外貨準備高は2011年10月時点では6,070百万ドルと輸出の8か月分程度は積み上がっており、これまでの主な投資国は中国で、ガス田開発に伴うパイプライン、水力ダム建設等のインフラ整備で資本収支が増加しており、対外債務は大幅に改善されたとのことでした。

【ヤンゴン市街地から離れた地の風景】



2) ミャンマー支援の歴史、経緯

1954年に『日本ビルマ平和条約及び賠償・経済協力協定』を締結し、賠償金2億ドル、経済協力10年間で5千万ドルを約束し、下記の協力を行ないました。

- ・技術協力（1954年開始）：432億円
（研修生受入：5, 589名、専門家派遣：1, 940名）
- ・有償資金協力（1968年開始）：4, 030億円（円借款）
- ・無償資金協力（1975年開始）：1, 925億円

しかし、1988年以降民主化運動と弾圧により新規円借款は慎重に行われ、2012年4月日緬首脳会談に基づき、2013年1月『社会経済開発支援』円借款貸付契約（総額約1, 989億円）調印と伴に、26年ぶりに国際金融社会に復帰し、同月ミャンマー政府は『第一回開発協力フォーラム』での国家計画・経済開発省発表で3つの方向性と10の改革優先分野を示した。

- ・3つの方向性
①マクロ経済の安定、②包括的な成長、③セクター/構造改革
- ・10の改革優先分野
①財政・税制、②金融セクター、③貿易・投資自由化、④民間投資、⑤保健・教育、
⑥食糧安全保障・農業、⑦ガバナンス・透明性、⑧ICT、⑨インフラ、⑩政府部門

協力方針として、2013年5月36年ぶりに我が国首脳（安倍総理）が訪緬し、国民の生活向上・人材の能力向上・インフラ整備等に910億円の協力を2013年度末までに行う旨表明があったと伺った。

3) 戦略的プログラム

2013年3月、総額195億円の無償資金協力贈与契約を締結し、中でも国内の総発電電力量の約1割を占め、戦後賠償や円借款等日本の支援により1960年以降運転してきたバレーチャン第二発電所の補修が電力安定供給で急務であるとのことでした。

2013年6月にミャンマー政府との間で円借款契約を締結し、対象は3案件で総額511億円で、事業内容は、生活基盤インフラ整備、インフラ緊急復旧改善、ティラワ地区インフラ開発で、供与条件は金利が年0.01%、償還期間が40年、調達条件は一般アントайдとのことでした。特にティラワ地区の開発は開発面積が2400ha（八重瀬町と同程度）と大きく、国際基準での開発と現政権の実績に大きく寄与する事から大きな関心を持たれていました。尚、ティラワ経済特区の工業団地起工式は、11月30日（土）に両政府および工事関係者による起工式が行われるとの事でした。

4) 今後の方向

今後は、マスタープラン調査に基づくインフラ案件形成、無償資金協力による日本企業参加の道筋、民間連携のための調査・投融資スキームの活用等、技術協力として経済・ビジネス人材の育成、金融システムの近代化、制度整備のための政府上流部門に専門家派遣等、国民生活向上のため感染症（マラリア、エイズ、結核等）対策プロジェクト、少数民族（130を超える）の支援策等、課題が多く山積されており経済復興の取組が急務であることを肌で感じました。

また、2015年に行なわれる総選挙でスーチー氏の動向が注視されており、政権の安定化が長期開発計画と制度面の支援に大きく左右されるとのことでした。

5) 国民性

企画調査員の割石氏よりミャンマーの国民性は『忘れないが許す』との言葉がありました。仏教徒が多いせいでもあるが、より善い人・寛容である・徳を積む等精神論が根底にあるのではとのことでした。

また、開発等のインフラ整備においても、順位は付けずバランスの良い開発が求められるとの事、配分に神経を使うそうです。

【JICAミャンマー事務所】

右写真はJICA所在ビル（サクラタワー）20階から見たヤンゴン市内の風景



(6) 丸紅(株)ヤンゴン支店、全日本空輸(株)ヤンゴン支店

沖縄経済同友会 事務局長 比嘉 正彦

ミャンマーでの企業視察最終日(12月1日(日))は、ティラワ工業団地の視察と昼食を挟みながら現地の状況をブリーフィングしていただいた。

対応者：丸紅株式会社 ヤンゴン支店長 黒田 浩司 様

丸紅株式会社 インフラ・開発建設部長 . . . 弘中 正俊 様

全日本空輸株式会社 ヤンゴン支店長 本宮 重人 様

※ティラワ工業団地視察に関しては丸紅対応、全日空は同行



【ティラワ工業団地の概要】

- 場所：ヤンゴン市街地から南東23km
- 面積：総面積2,400ha(横2.4km×縦10.0km)／先行開発エリア396ha
※山手線内側の約40%程の広大な面積
- 開発会社：Myanmar-Japan Thilawa Development Ltd
設立：2013年11月
株主：49% エム・エム・エス・ティラワ事業開発株式会社
※丸紅・三菱・住友の頭文字(M・M・S)により命名
※今後10%程度をJICA(外務省所管)が保有予定
41% ミャンマー民間SPC
10% ミャンマー政府

●事業内容：工業団地の開発・販売・維持管理

●優位性（4つのポイント）

- ①経験豊富な日本人が常駐 5人駐在
- ②恵まれた立地条件 消費地が近い。港に隣接
- ③インフラ整備が見込める 日本政府によるODAでインフラ整備予定
 - ・ダム建設（上水・貯水）
 - ・電力整備（変電・送電）
 - ・道路・橋梁整備（道路・架橋）
 - ・鉄道整備（ヤンゴン駅の整備）
- ④経済特区 優遇税制・ワンストップサービス
 - ・政府機関を集約（許認可・税関業務等）

●先行開発エリア（396ha）の選考ポイント（3つのポイント）

- ①高台立地 サイクロン水害に備え平均標高6.5m、海拔7m堤防設置
- ②硬い地盤 粘土質層で強度が硬い（強度8～30：硬い・非常に硬い）
- ③居住住民 居住住民が少なく立ち退き交渉が容易

●開発スケジュール 2013年11月：造成工事着工 2015年：第1期造成工事完了

【説明】

- ヤンゴンとティラワの間には大きな川があるが現在2本の橋しかない。しかも1本は片側1車線で流通アクセスが悪いため日本のODA支援で大きな橋を建設予定である。
- ティラワ開発には日本も積極的であり、安倍総理、麻生副総理他政府の要人が頻繁に訪れている。これから案内する視察現場は、経済産業省の磯崎政務官、仙石元大臣やミャンマーの大臣4名が参加して昨日、地鎮祭（鍬入れ式）を行った場所である。
- ミャンマーは軍事政権下で、経済振興の立ち遅れが大きい、特に「港湾」「電力」「水」「道路」のインフラが未整備の状態で早急に対策を打つことが必要である。
- 現在のテインセイン政権になり解放政策がとられ一気に開発が進んでいるが、現政権は次回選挙（2015年）までに具体的な成果を出すことを求めている、丸紅としても今まで経験したことが無いようなスピードで開発に着手している。

【質疑応答】

Q1：ティラワへの進出を決定した企業はあるか。

A1：問い合わせは多いが未だ具体的に決定した企業はない。

インフラに対する不安等が影響していると思われる。

Q2：名前が工業団地とあるが、業種制限があるのか。電力整備等時間が係るインフラ整備を待たずに「食品」「繊維」等を先に入居させた方がベターでは？

A2：業種制限は無い。当然、「食品」「繊維」等の進出も見込んでいる。

Q3：日本企業が開発を手掛けているが第3国の入居も可能か。

A3：入居に制限は無い。我々は「台湾」「中国」「タイ」「インドネシア」更に「欧米」企業の進出も想定している。現に問い合わせがある。

Q 4 : 広大で肥沃な土地に恵まれているが農産物の 6 次産業化を政府は検討しているか。

A 4 : 確かに温暖で肥沃な土地に恵まれているミャンマーは農産物が良く採れる。

残念ながら政府が積極的に産業化しようとする動きは見られず民間任せである。
民間ベースでは、日本の某商社が現地の農協と組んで「米」の輸出を行っている。
丸紅も「鳥」に着目し生産量を高めるため「飼料インフラ」の整備を進めている。
海産物も豊富である。「漁獲量」は日本と同じぐらいあるが、漁船の性能が低い
ためタイの漁船に持っていかれている。通行料の形で課金はしているが勿体ない。
今後漁業の産業化についても検討の余地がある。

【ティラワ工業団地にて】

視察前日の 11/30（土）に現地造成工事開始の鍬入れ式があった。

式典機材撤去直前の集合写真



【ヤンゴンとティラワ間の橋】



【ブリーフィング】

～丸紅黒田支店長によるブリーフィング（ジェトロ資料を活用しながら説明）～

- ミャンマーと日本の時差は2時間半と言われているが、50年とも揶揄されている。
ミャンマーの1人あたりGDPは年900ドル前後と言われている。ちなみにヤンゴン市内は2,000ドル前後と言われている。日本の1963年頃は、為替レート360円で実質価値に換算したGDPはちょうど1000ドル前後でミャンマーの現在とほぼ一致する。白物家電はGDP1,000ドルから売れ始めると言われておりミャンマーが今その時期。
- 50年前はタイの駐在員がヤンゴンまで買い出しに来ていたようである。経済振興の立ち遅れがあるが、10年は難しくても20年後には現在のタイの水準になると思われる。
- 外国からの投資は、中国が最も大きく43億ドルあるが、北部山間部のダムインフラの工事中断で2012年は前年比▲90%以上も落ち込んでいる。
- 日本からの進出も昨年は倍増した（2012年は約130社）業種的には会計、物流関係が多い。在日邦人は700人程度。但し、タイの7万～10万に比較するとまだまだである。
- これまでは労働賃金の安さが魅力であったが、最近はヤンゴンを中心に高騰している。労働者は月50ドル前後が80ドル前後。大卒は100ドルでも採用が難しくなっている。
- 日本企業も繊維産業を中心に進出が進んでいる。日本の繊維輸入は2割も伸びている。伊藤忠は2000人規模の工場を作ったし、ABCマートも巨大工場を建築中である。
- 国内GDPは5兆円程度でトヨタ自動車の売上げの約半分。ヤンゴンは1兆円程度。近代化により1次産業の国内GDP割合が47%程度から30%程度まで急落している。
- 中古車市場も急増している。月1万台のペースで増加し現在は国内に40万台ほど普及。ただ、自動車産業では外資企業に対して工場を保有していると販売も認めるが、単独でディーラー（販売会社）のみを保有することは国内業者保護のため認可していない。そのような場合は地元企業とのジョイントしか方策はない。未だ完全自由化ではない。
- 資源が豊富であり「中国」「タイ」更に最近は「韓国」も開発権益を取得した。特に、天然ガスは中国がパイプラインを敷設し昆明（中国の都市）への供給開始。
- 民主化が進んでいるように報道されているが、連邦議会（国民代表院、民族代表院）の2つとも議員の25%を軍人議員が占めることを憲法で明記しているため、スーチー氏の率いる国民民主連盟はそれぞれ8.4%、1.8%と議会では少数派でしかない。

～全日空本宮支店長によるブリーフィング～

- 全日空は2012年10月に成田 ⇄ ヤンゴン間を12年振りに再開した。
1997年のミャンマーのアセアン加盟を見込み96年に航路開設したが、軍事政権下で利用客も無く、2000年3月から休眠していた。ミャンマーが外貨持出を禁止したため稼いだお金を日本に送金することもできず閉鎖でなく休眠としていた。
- 今年9月から大型機材（B767型）にし、更に週3便から週7便に増便し座席数を増やしたが搭乗率（52%程度）は変わらない。つまり、搭乗者が10倍～12倍程度増えた。
- 韓国は「大韓航空」と「アジアナ航空」が乗り入れており、搭乗率も7割台と高い。韓国は「韓流ドラマ」「K-POP」等の文化で若者を取込む戦略が成功している。ちなみに、昨年ミャンマーから日本に渡った人が5千人に対し韓国は7万人である。
- ミャンマーはポテンシャルが高く親日的、当社もアジアハブ化の重要拠点としたい。

【所感】

- 今回、タイ（バンコク）で3日間視察した後にミャンマー視察を行ったことで改めて2国間の経済格差をより鮮明に実感した。
- 両国に共通していたことは、仏教徒でおだやかな性格の人々が多く、更に親日的であることである。また、いづれも温暖で広大な平野に囲まれ「米」を中心とした農作物に恵まれ豊かな国（国力がある）であること。更に、鉱物資源にも恵まれ欧米、中国、韓国等さまざまな国・地域による「資源開発利権の獲得」、更には「今後の経済成長に伴う巨大なマーケット」として進出ラッシュが起こっていることである。
- 特に、ミャンマーは劣悪な居住環境で生活し、裸足で歩く物乞いも多く貧困層が多かったことが印象的であったが、視察を終えた後で聴講したブリーフィングによりさまざまな経済指標と実態経済がぴったりリンクしていることが良く理解できた。
- 視察を通して「天然ガスを始めとする恵まれた鉱物資源」、「豊富な労働力（性格が穏やかで手先が器用な人が多い）」など「潜在的なポテンシャルの高さ」を改めて感じた。今後民主化の進展に併せて、ティラワ工業団地を中心とした経済政策がミャンマーを牽引し、近い将来、東南アジア有数の経済大国に成長する可能性を実感した。一方で、日本はインフラ等の「ハード面での支援」と同時に「文化（衣・食・芸）」等「ソフト面においても他国に先んじて広報していくこと」の重要性を痛感した。
- 今回の視察は、日本の対アジア戦略のゲートウェーを目指している沖縄が今後アジア諸国とどのようにビジネス展開していくべきかを考える意義深いチャンスとなった。休日にもかかわらず、早朝ホテルまでお越しいただきバスに同乗の上、視察に同行し、現場の実態を詳細にご説明いただいた、丸紅、全日空の皆さまに感謝したい。

【ヤンゴン市内レストランにてブリーフィング】



平成26年1月
沖縄経済同友会 事務局